

オーストラリアでのラスター彩の研修

第 6 回

九州電力若手工芸家国内外派遣研修制度

研 修 報 告 書



平成 14 年 3 月

梶 原 日 出

目 次

	頁
1 研修にあたって	1
(1) 研修期間	
(2) 研修先	
(3) 研修目的	
2 研修日程	2
3 研修報告	3
(1) ラスター彩との出会い	3
(2) オーストラリアに着いて	3
(3) Stokers Siding Pottery	5
(4) ラスター彩とは	6
(5) ラスター彩の工程	6
①水引き	7
②けずり	7
③素焼	7
④施釉	7
基礎釉薬	8
ELEY Base	9
⑤本焼き	10
⑥絵付け	10
ピグメントの調合比	11
⑦ラスター本焼き	12
⑧磨き	12
(6) 展示	13
(7) Murwillnmbah周辺の作家を訪ねて	14
(8) シドニーの作家を訪ねて	15
(9) メルボルンの作家, ギャラリーを訪ねて	16
4 研修を終えて	17

1 研修にあたって

(1) 研修期間

平成13年10月21日～平成14年2月14日

(2) 研修先

オーストラリア ニューサウスウェルズ州

Murwillumbah(Stokers Siding Pottery)

(3) 研修目的

伝統的な小石原焼の中で自分なりのスタイルを確立してきたが、今回の研修で新しい技術の習得を目指す。

また、小石原焼の素晴らしさをPRする。

2 研修日程

年月日	滞在先	研修内容	視察等
H13. 10. 21	福岡出発		
10. 22	ブリスベン到着		
10. 23	N. S. W州		
	Murwillumbah		
	Stokers		(陶芸家) Michaela Kioeckner
	Siding		
		水引き ↓ 素焼 ↓ 施釉 ↓ 絵付け ↓ 本焼 ↓ ラスター本焼 ↓ みがき	この工程を何度もくり返す
		※ その間に、小石原の土でのテスト、釉薬のテストを行う	
H14. 2. 2	移動		
H14. 2. 3	シドニー		(陶芸家) Roswitha Walff
H14. 2. 4	メルボルン		(ギャラリー・工房) Redgum Gallery Potter Cottage Stone House Potters Mexander Pottery Bellbrae Pottery
H14. 2. 14	福岡到着		

3 研修報告

(1) ラスター彩との出会い

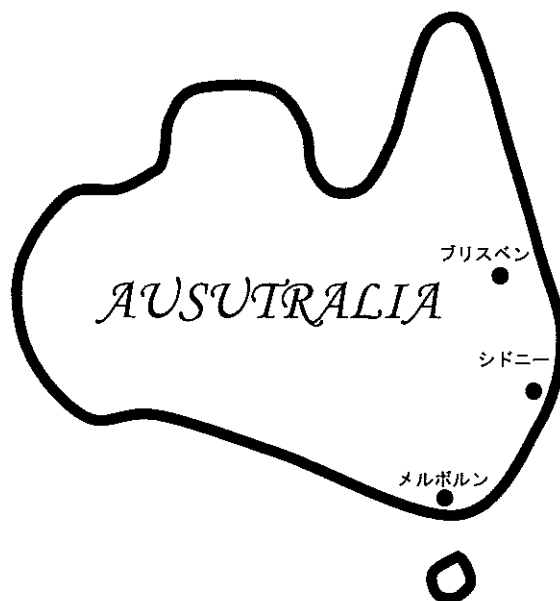
以前から「九州電力若手工芸家国内外派遣制度」のことはよく知っており、機会があれば是非とも応募し、海外で焼き物をとおした人との触れ合いや自分の技術に幅や深みをもたせる勉強をしたいと考えていた。

そんな折、オーストラリアと日本との交流事業で私が住む小石原にボブ・コネリー氏が3週間滞在されることがあり、彼の作品を見る機会を得たが、生まれてはじめて見るラスター彩の器の美しさに触れ、とても感動した。

このラスター彩に引き寄せられるように興味を覚え、是非、この技法を習得したいと考え、彼に相談したところ、快く引き受けてくださり、この研修が実現できた。

(2) オーストラリアに着いて

英語が全くと言っていい程話せない自分は、スーツケースに不安をいっぱい詰め込んでブリスベン空港に降り立った。英語が話せなくてもハートと腕で答えれば何とかかなるだろうと思って臨んだのだが、現実やはり厳しかった。空港には3カ月間の師匠にあたるボブ氏と、彼の奥さんが暖かく迎えてくれ、ブリスベンから車で2時間のMurwillumbahのStokers Siding Potteryに向かった。車窓から見る景色は、大きな空に、海、トロ



ピカルな木々，これからどんな生活になるだろう，と不安と期待を胸に，私は窓にしがみついていた。

彼等は英語で説明をしてくれているのだが，半分も分からないため，車の中では「Yes」しか言えず，顔がひきつってしまっていた。

ほのぼのとした牧草地を抜け，舗装されていないガタガタ道を抜けると彼等の家に到着した。着くとすぐ，ワラビーが現れ「新顔だな」と言っているかのように去っていき，オーストラリアについたぞ，という実感が湧いて来た。彼等は，自分達の部屋を僕に明け渡してくれ，ベッドルームとリビングルームを準備してくれていた。そして自分達は，大きなブルーシートでテントを建て，そこで3カ月間暮らすと言う。あまり申し訳ないので「自分がテントでいいよ」と言っても「夏は，テント暮らしがサイコーだよ」とニッカリ笑って答えてくれた。感謝の気持ちをたくさん言いたいのに，言えないもどかしさが残り，いよいよオーストラリアの生活がスタートした。

(3) Stokers Siding Pottery

Stokers Siding Potteryは、経営者のボブ氏の工房とギャラリーに分かれている。ギャラリーには、マネージャーとして働いている彼の奥さんのほか、3人の従業員がおり、想像以上にずっと大きく立派で驚いた。

そのギャラリーには、Murwillumbah周辺の陶芸作家数十人の焼き物、木工品、絵画、カード等お土産品を扱っていて、田舎にあるにもかかわらず、お客さんも絶えない充実したものとなっていた。また、工房はギャラリーの裏手にあり静かで、川辺に面し美しい鳥や花々、時折牛の音がする、自然に包まれた所だった。



(ギャラリー正面)

とても古い建物だが、きれいにペンキが塗られ、手入れされている。



(ギャラリー内)



(ギャラリー内の作品)

ボブ氏のラスター彩以外の作品と、他の陶芸家の作品

(4) ラスター彩とは

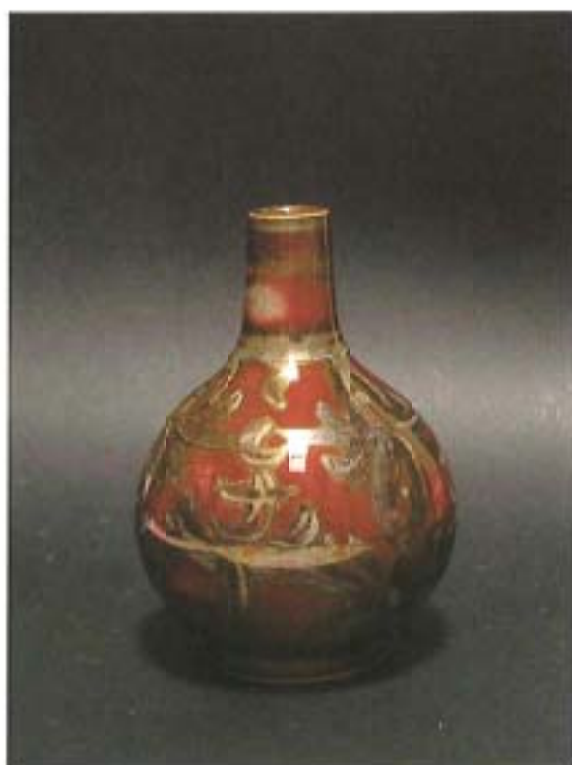
陶器の表面に、金属や金属酸化物のフィルム状の皮膜を600度～800度の低角下度で焼きつけ、真珠風の光沢や虹彩を出した焼き物。

この技法は、9世紀にメソポタミアで始まったといわれ、次いでエジプトで発達し、のち12、13世紀のペルシャ陶器に多く用いられた。

その流れをくむものに15世紀のスペイン陶器やマヨリカがある。

(5) ラスター彩の工程

1	→	2	→	3	→	4	→	5	→	6	→	7	→	8
水引き		けずり		素焼		施釉		本焼き		絵付け		ラスター本焼き		磨き





① 水引き

慣れない土に手こずった。ここで使っている土は、半磁器と呼ばれる物で、ラスター彩をするのには、とにかく薄くろくろを引くよう言われ、小石原では、少々ろくろの技術には自信があったのだが、作りの面でも教えられる事ばかりで振り出しに戻ったような気持ちで1から練習した。ろくろの回転も、小石原とは逆回りで自分用には両方の回転が使える、ろくろを準備してくれた。



② けずり

表面のろくろ目を、絵付けの筆が、運び易いように消す。高台の部分に金彩を施し、高台内にサインを入れる為、必ず平底ではなく高台をつける。

③ 素焼

小石原では、960度前後まで温度を上げるのに対し、ここでは、800度程度で焼く。



④ 施釉（釉薬について）

伝統的なラスター彩は、鉛釉がベースになっているが、鉛釉が食器に向かない為、アルカリ釉を使う。色々な、細かい発色を出す為に、2つのベース釉を作り調合比を変えていくことで、何十種類もの釉薬を作り、これを使い分ける。

基礎釉薬

AW BASE GLAZE (Cone 6)	
Ferro Frit 4110	68%
Napheline	10%
Ball clay	5%
Silica	5%
Spodumene	5%

ELEY Base Glaze (Cone 3)	
Ferro Frit 4110	83%
Potash Feldspar	12%
Bentonite	3%

AW base

Royal blue	%	Green	%
Tin oxide	2	Tin oxide	2
Coco3	2.5	Copper Carbonate	2~6
Black Iron oxide (or red iron)	0.5	Black Iron oxide (or red iron)	0.5 1
Black	%	Blue/Green	%
Tin oxide	2.5	Cuco3	2
Cuco3	2	Coco3	2.5
Cr203	1	Black Iron oxide	0.5~2
Coco3	2.5	Tin oxide	2.5
Black Iron oxide	0.5~2		
Light tan transparent	%	White	%
Tin oxide	2.0	Tin oxide	3.5
Black Iron oxide (or red)	1 2	Zircon opacifier	2~3

※ ここでは、日本語訳が難しい為、英語で調合比を示す

ELEY Base

Chrome Green	%	Turguoise Blue	%	Peacock Blue	%
Cr203	0.25~1	Cuco3	0.25~1	Copper Carboonate	5.8
Tin oxide	2.5	Tin oxide	2.5	Chrome Oxide	0.2



(窯とゼーゲル)

花器の中の釉薬

(%)

Ferro frit 4364(Lead bisilicate)	29
Ferro frit 4271(Calcium borate frite)	41
Potash feldspar	8
Zinc oxide	4
Kaolin	4
Silica	4
Tin oxide	10
Bentonite	5

⑤ 本焼き

ラスター彩の釉薬は、ゼーゲルコーンの5か6を用い、1200℃で焼成する。

⑥ 絵付け

ここでは、基本的なラスターの模様を筆描きと、トレーラーと呼ばれる細かいスポイドのようなものの、2種類を使い、練習を繰り返した。

絵付けをした事のない自分は、ここで随分苦勞し、頭を抱え込む日が続いたが、数をこなして行くうちにコツがつかめてきた。

まず大切な事は、画面の設定。画面を3分割、5分割、などに分割し、連立模様で構成していく。

次に筆の大小を使い分け勢いのある線を出すのだが、これも随分練習が必要だった。

最後に顔料だが、金、銀、銅、プラチナなどの高価な材料を用いる為、使用方法には細心の注意を要する。



(小石原の土でのテスト)

ピグメントの調合比

Red	%	Irridescent red	%
Copper Suphide	40	Cus	40
Molochite 200	35	Molochite	35
Burnt amber	5	Burnt amber	5
Kaolin	20	Gum Arabic	1or2
Gum arabic	1or2	Bismuth Sub-nitrate	2
Mixed pigment (Silver + Copper) ①		Mixed pigment (Silver + Copper) ②	
Cus	30	Cus	30
Agcl	4	Agcl	2
Molochite	36	Molochite	36
Burnt amber	6	Burnt amber	6
Kaolin	24	Kaolin	24
Gum arabic	2	Gum arabic	2
Mixed pigment (Silver + Copper) ③		High Silver Mix	
Cus	30	Cus	30
Agcl	2	Agcl	16.5
Molochite	36	Molochite	30
Burnt amber	6	Burnt amber	5
Kaolin	24	Kaolin	25
Gum Arabic	2	Gum arabic	2
Bismuth			
Silver only			
Agcl	32.5		
Molochite	35		
Burnt amber	7.5		
Kaolin	25		
Gum Arabic	2		

※ 絵付けに用いる顔料をピグメントと呼ぶ



⑦ ラスター本焼

4～5時間で500℃まで上げそれから、ゆっくり610℃までもっていく。窯の中で還元、酸化を4回繰り返す行うが、還元には15～20分、酸化には3～10分程度時間をかける。

そして、最後にテストピースを取り出し銅、銀のしみかたで火を上めるタイミングを決める。



磨く前



磨いた後



⑧ 磨き

右記の写真の通り窯から出した際は、絵付けした部分に顔料の土が素焼になって残った状態だが、バケツに水を張り少し洗剤を入れ、細かい目のスチールタワシで磨くと、表面の土がはがれ、器にしみ込んだ美しい光沢が現れてくる。



(6) 展示



次々に焼き上がる作品のうちいい上がりの分は、日本での展示会用に外し、残ったものは、ボブ氏のギャラリーに展示する事ができた。展示会用に日本に送った器は11箱になった。



REDUCED LUSTRES

REDUCED LUSTRES, also known as smoked or Arabian lustres, were first produced in 9th Century Iraq, spreading with the Moors into Spain where a major flowering occurred. By the 14th Century some Italian studios possessed the technique, but its difficulties and uncertainties lead to a virtual demise until the 19th Century saw a revival by some English and European potters. The technique involves the application of gold, copper and silver salts mixed with clay to specifically formulated fired glazes, and then firing the pots to red heat with cycles of oxidation and heavy smoking reduction. After firing, the smoked pots are carefully cleaned — hopefully revealing the lustre.

TODAY lustre can be easily obtained using resin lustres fired in oxidation. However, the elusive quality of smoked lustres and their possibilities for unusual colours, spectacular iridescence, haloing and other incidental effects (once considered defects) have fascinated some contemporary potters so that reduced lustre is currently undergoing a renaissance.

KAJIWARA HIZURU is a 14th generation potter from Kōshiwara, a pottery village in Kyushu, Japan. He has studied the reduced lustre technique with Bob Connery.

Stokers Siding Pottery

Stokers Siding NSW 2484 (02) 6677 9208

ラスター彩用のしおり

自分のラスター彩用のしおりも製作してくれ作品と共に並べた。

ラスター彩がどんな物なのかをお客さまに分かってもらうのも大切な事だと言う。

(7) Murvillumbah周辺の作家を訪ねて

Michaela Kloeckner

彼女は昨年ボブ氏と共に小石原を訪れ3週間滞在され、文化交流を行っていた。

彼女の作品は、とても絵画的で造形もめずらしく、とても興味深かった。(右の作品)



Colin Drake

彼は、電気も水道もない山奥で塩釉と薪窯の両方をやっている人だった。

2つの窯で1つの煙突という窯の作りが面白かった。(下の左が窯／右が作品)



Peter wallare

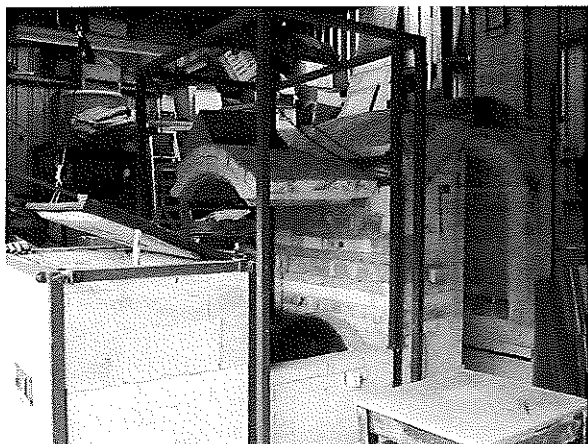
彼は、結晶釉をやっている人でそれだけで興味深かったが、大物作りも素晴らしい、小石原の作り方とは全く異なり50cm以上あるつぼを小石原では、2～3日かけて作り上げる所を1時間で作って見せてくれた。



(8) シドニーの作家を訪ねて

Roswitha Wulff

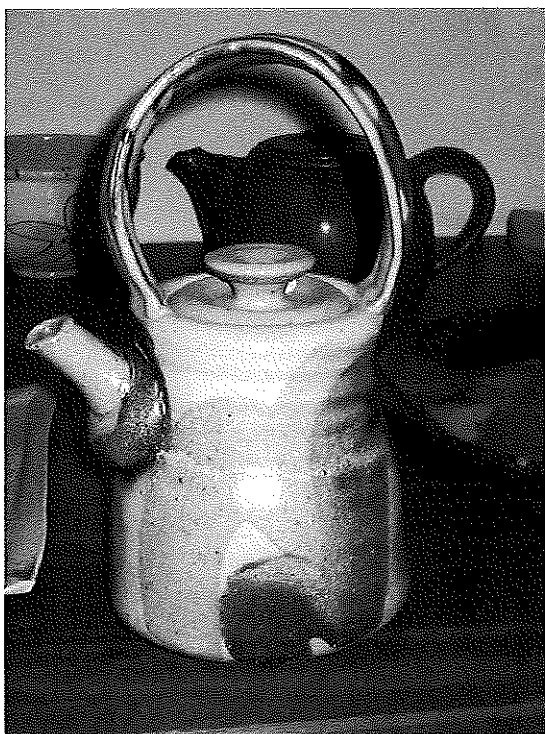
彼女は、オーストラリアでは有名な陶芸家で大学でも教えている方だった。日本にも何度か来られていて日本の焼き物に関してとても詳しかった。作業場で、気付いた点としては、彼女が高齢ということもあり、窯の蓋が圧力で簡単に開けられてたり、女性でも簡単に窯を入れる工夫がされている事だった。そして、びっくりする程片付けられていた。



(工夫を凝らした窯)



(Roswitha 氏の近年の作品)



(Roswitha 氏の初期の作品)

(9) メルボルンの作家、ギャラリーを訪ねて

Potter Cottage

ここは、1958年から44年間続いている。古いギャラリーで多くのメルボルン在住の陶芸家の作品を扱っていた。中でも自分が勉強してきたラスター彩の作品も見ることができ、とても勉強になった。ここでいいと思ったのは、ギャラリーが喫茶スペースを持っていてゆっくり作品を見れるように工夫されている事だった。



Warrandyte Ceramics Studio & Pottery School

この学校は専門学校というより、陶芸教室といった感じで、技術はあまり高いものではなかった。日本の陶芸雑誌を手本にしている所が面白かった。

Stone house Potters

森の中にあるギャラリーでメルボルン在住の陶芸家、木工家の作品をあつかっている充実したギャラリーだった。オーナーが鳥好きなのかオーストラリアの美しい鳥が集まってくるような仕組みで餌付けされていてお客さんを楽しませていた。



4 研修を終えて

出発時は、頑張ろうと言う意気込みとともに、果たして短い4ヵ月でどこまでやれるだろうかという不安があった。しかし、いざ行ってみると、ボブ氏の意気込みが言葉を十分理解できない自分でもひしひしと感じられ、必死になって彼について行くというだけで、研修の4ヵ月はあっという間に過ぎた。

研修では、朝早くから夜遅くまで工房に入り詰めの日も何日も続き、絵付けに行きずまり頭が張り裂けそうになった事や、ラスター本焼きの後の磨きで、1日中磨き続け手足が筋肉痛になり、手に血豆が出来た事もあった。自分の今までの一生を振り返っても、こんなに頑張ったのは、生まれて初めてのこともかもしれない。

そのかいあってか、本焼きを重ねる度に上達し、これが本当に自分の作品かと目を疑いたくなるような納得のいく器を作る事に成功した。これも一重にボブ氏の指導の賜物に他ならない。

小石原焼と、ラスター彩をどのように自分の中で消化、吸収して行くかは、これからの自分の課題であり、また、作品作りが楽しみで仕方がない。

早速、新しい窯作りにとりかかった。今年の10月には、ボブ氏との合同展示会が決まっている。是非それまでに新しい作品を形にし、成功させたい。

最後になったが、この研修を成功に導いてくれた、ボブ氏、Stokers Sidingの皆様、協力してくれた家族、そしてなによりチャンスを与えてくれた、九州電力株式会社の方々に感謝の気持ちを申しあげたい。

平成14年3月

梶 原 日 出